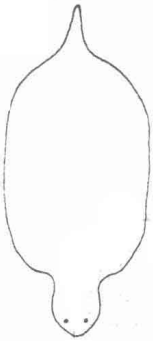
ピタゴラス豆畑に死す

江戸川乱歩賞受賞第一作

小峰元

ピタゴラス豆畑に死す



小峰元

講談社

著者略歴

本名、廣岡澄夫。大正10年3月神戸に生まれる。昭和16年大阪外国語学校(現、大阪外大)西語部卒。貿易商、教員等を経て、昭和18年毎日新聞社入社。現在、同社大阪本社編集委員。

「アルキメデスは手を汚さない」(講談社刊)にて昭和48年度江戸川乱歩賞を受賞。著書として他に、少年推理小説「謎の百万塔」がある。現住所、大阪府豊中市岡町北3—7—30。

ピタゴラス 豆畑に死す

第1刷発行 昭和49年4月4日
第2刷発行 昭和49年5月20日
著者 小峰 元(こみね・はじめ)
発行者 野間省一
発行所 株式会社 講談社
〒112 東京都文京区音羽2—12—21
電話 東京(03)945—1111(大代表)
振替 東京3930
印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 1974 HAZIME KOMINE

定価はカバーに表示してあります。 (文2)

目次

起の章　セイケン　大和に死す……5
承の章　ヨウケン　浪華に死す……81
転の章　オチケン　飛鳥に死す……169
結の章　ロウニン　江戸に死す……248

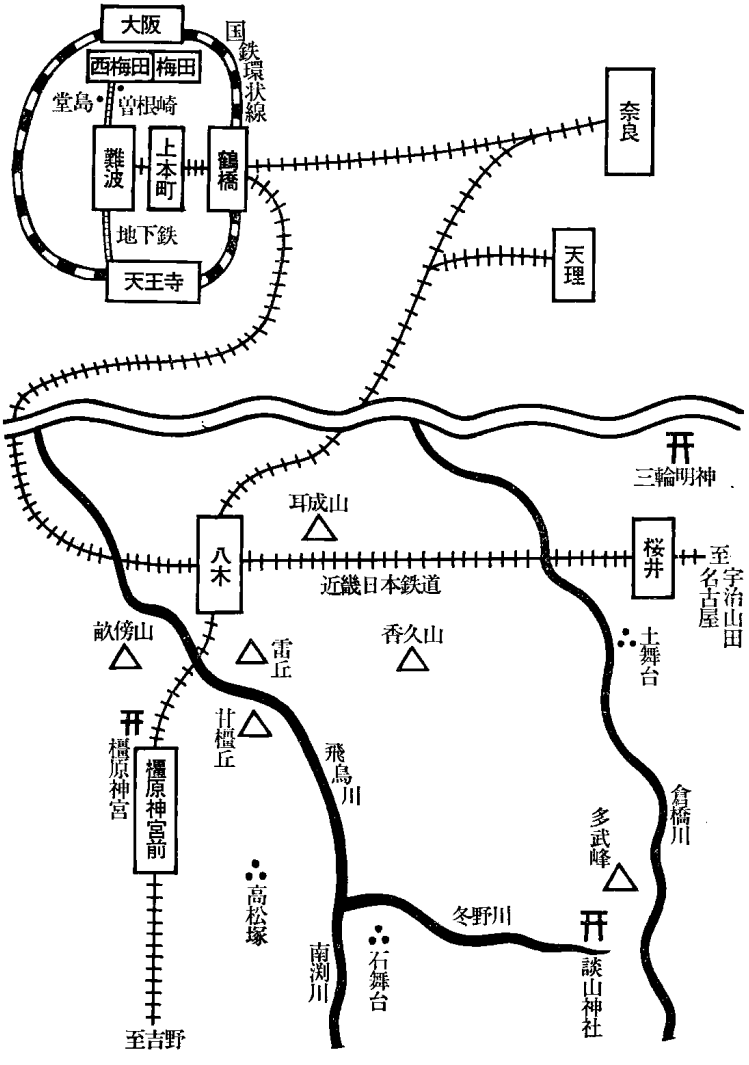
装幀　和田　誠

殺した人も殺された人も
惚れた人も惚れられた人も
架空の人でモデルはない
しかし物語は絵空ごとではない

――セルバンテスの言葉から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ピタゴラス　豆畑に死す


大阪
国鉄環状線
西梅田
梅田
堂島
曽根崎
難波
上本町
鶴橋
地下鉄
天王寺
奈良
天理
三輪明神
耳成山
八木
桜井
近畿日本鉄道
至名古屋
宇治山田
畝傍山
雷丘
香久山
土舞台
橿原神宮
橿原神宮前
甘橿丘
飛鳥川
倉橋川
多武峰
高松塚
冬野川
南渕川
石舞台
談山神社
至吉野

セイケン 大和に死す

1

電車から吐き出されたとき、その二人は、ちょっと縺(もつ)れた。

「やるか！」

と背高(のつぽ)のほうが甲高(かん)い声を出した。

「くるか！」

と低いが太ったほうが応じた。

真紅と濃紺の二つのナップ・ザックが同時にプラットホームに投げ出され、間髪を置かず、ノッポの足蹴りが太っちょの股間に決まった。と見えた瞬間、太っちょは自ら後ろへ転がって、見事な〝回転受身(レシーブ)〟であった。

「おぬし、できるな」

ノッポはニヤリと唇を歪(ゆが)めた。覗いた歯の白さが、まだティーン・エージャーであることを示して

いた。そして右手を上に、左手を前に構えて腰を低めると、いえーっ、と奇声をあげて、摺り足で間合いを詰めた。

十数人が、格好の見物とばかりに、二人を取り巻いた。同じ電車の中から降りたばかりの、ゆきずりの赤の他人たちである。だから、シャモの蹴合いを見物するように目を細めている若者もいれば、不安げに眉を顰める年配者もいた。若い女性づれは、さすがに気味悪そうに、そして穢らわしそうに、足早やに立ち去ったが、遠巻きにした人垣は、つぎの一撃の結果を期待して、声もなく立ち竦んでいた。

「喧嘩か」

肩と肩の間から首を突き出した一人が、誰にともなく言った。

「らしまんな。ノッポの構えは、あら空手だんな。それも有段者の構えやと、わては見てま。太っちょは柔。いまの受身は黒帯級でっせ。こら、ええ勝負が見られるんとちゃいまっか」

禿げた頭の汗を、つるりと掌で拭いて、薄ら笑いを浮かべての〝解説〟であった。

ノッポが間合いを詰めるに従って、太っちょは、じりじりと後退して、駅名標示板を小楯に取った。

「近畿日本鉄道・桜井」

不趣味な太文字の横で、太っちょの額に汗が滲んでいた。駅名の下に記された、

「飛鳥めぐり・山の辺の道散策・当駅下車」

の優雅な案内とは、およそ不似合な、歪んだ顔であった。頬の産毛が、まだ黒くなりきらず、その稚さが幾分かは表情の険悪さを柔らげてはいたものの、細めた目の輝きは鋭い。

間隔五歩。ノッポの頬の筋肉が、ぴくりとひきつって、

「いやーっ、はっ」
と二度めの奇声を発したとき、
「あほ！　やめんかい！」
人垣を掻き別けて、若い警官が緊張した顔を突き出した。左手で警棒を握りしめて、押取り刀というところであった。
「惜しいところで邪魔が」
と呟いたのはノッポであったが、同時に、ざわと揺らいだ見物人全員の感想でもあった。
「勝負は、お預け、とめいりますか」
太っちょが、けろりとした顔つきで応じた。語尾を鼻に抜いた巻舌であった。本人は気取ったつもりであろうが、関西生まれの警官には、キザで生意気で、ふざけたガキや、としか聞こえなかった。
「あほんだらめが、人騒がせな。二人とも、ちょっと来て貰おか」
「来い？」
ノッポが不思議なことを聞くように、目を尖らせた。
「なんの用……」
ですか、と言いかけたが、相手が自分といくらも年齢が違わないのを見て、ぷい、と顔を逸らした。ポリ公、それも田舎のド新米ポリ公には、敬語はおろか、口をきくのも真っ平、と竦めた肩が語っていた。権威をないがしろにされた、と敏感に悟って、こんどは警官が気負いこんだ。
「なんの用や、とはなんや。さんざんぱら人騒がせな真似をしときながら」
「集まって騒いでくれと頼んだわけじゃない」
ノッポは空を見上げて嘯いた。青い空だな、と関連もなく思った。大和は国のまほろば。公害を寄

せつけないのは、さすが、とも思う。
「そうさ」
と太っちょが、濃紺のナップ・ザックの土を、調子をとって払いながら口を挾んだ。
「お集まりのご一同さまにも」
張り扇のように、パンパンと掌を払って、
「警察ご当局にも、拘わりあいのない、プライベートな問題でゲス」
警官という野暮な止め男の出現で、興ざめた顔つきで崩れかけていた人垣が、これは二幕めのほうが面白そうだぞ、と足を止めた。警官が子供にナメられとる、これが見逃しておらりょうか。坊主、しっかりせえ、わいがついてるでえ、と目を輝かせた。こうなっては後へは退けない、威信にかかわる、と警官は声を昂めた。
「そこで、ごじゃごじゃしてたら通行人の迷惑やと言うてんのが判らんのか。プライベートの問題やったら、プライベートらしく、そこらの陰で静かに話し合わんかい。けったいな大声張り上げられたら、はた迷惑で、こっちも黙っとるわけにいかんわい」
「そら理屈や」
と、制帽をアミダに被った駅員が、警官に目で挨拶を送りながら、
「源やん、ええこと言うてくれた。ほんまに近鉄としては迷惑やで、ここで騒がれたら」
四年前、地元の奈良県立飛鳥高校を卒業した同窓であった。大沢源吉は〝海外研修もあります〟というポスターに引かれて警官になり、稲村邦彦はタダで大阪、名古屋、伊勢へも行けるというので近鉄の入社試験を受けた。志望の動機が動機であっただけに、
「ごっつう、しごかれたでェ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と四年ぶりに再会した桜井駅頭で頷き合ったことであった。稲村は桜井駅案内掛勤務。大沢は、その駅前の派出所詰め。友情はたちまち復活した。だから、プラットホームで騒ぎが起こったとき、稲村は早速、大沢に〝出動〟を要請したのであった。

「君らかて、そこで、ふうふう鼻息を吹いてたら、ええ見せもんになるだけやでェ。まあ、こっちへ来て頭を冷やしたほうが、ええのんとちゃうか」

まったりとした大阪弁でやられては、気合い抜けの思いで、ノッポと太っちょは、顔を見合わせると、両手を拡げて、首を竦めた。外国テレビ映画で覚えた、そうした身ぶりが、まだサマになる年齢であった。二十歳を過ぎては、キザになる。俺には、あの真似は、もうできんな、と思いながら、稲村は駅員休憩室へ案内した。

「で、なんやねん。喧嘩の原因は」

大沢は首筋を伸ばして威厳をつくろってから、ことさらに低音で言った。

「喧嘩？　誰の？」

とノッポは長い脚を組み合わせて、ぶらぶらと揺さぶりながら、のんびりとした口調で反問した。

「誰のやて？　ナメたらあかんで。これは公務で聞いてんのやから。派手にやってたやないか」

「ああ、あれね。あれは、ただの、そう、ちょっとした体操」

「なんやて」

「なにしろ東京から新幹線、名古屋から近鉄と乗りずくめ。いい加減、背骨が痛くなって、手足が痙攣しそうになったから、二人で、ちょいと柔軟体操をやったってこと」

「あっしの床運動〝その場後方宙返り〟は、かなり観衆に受けた感じでやんしたね」

太っちょが、低い鼻をうごめかして、上体を乗り出した。大沢は、ちらと稲村に目を走らせて苦笑

した。覚えがあった。

飛鳥高校三年のときであった。無札で大阪行特急電車に乗った。あと三分で大阪という時間を見計って、派手な取っ組み合いを始めた。止めに入って、ぶっ飛ばされた車掌は、大阪駅に着くのを待ち兼ねて、応援の駅員とともに、二人を駅長室へ引っ立てた。若い者は元気でええのう、と訳知り顔の駅長の説諭に神妙に低頭してみせると、

「仲よう大阪見物するのやぜ」

と擦り傷に赤チンまで塗ってくれた。駅長に見送られて、いろいろお世話になりました、と改札口を出たとたん、笑いすぎて腹が痛くなった。

「その手は古いぜ」

と稲村は顎を突き出して勢いこんだ。

「乗車券、持ってえへんのやろ」

二枚差し出されて、当てが外れた。

「まあ、体操なら体操でええが……」

と大沢も締まりのない口調で、

「ともかく名前だけなと聞いておこか」

「名前！」

とノッポが突拍子もない声を上げて、太っちょの顔を見つめた。

「うっかりしてた。君の名を、まだ聞いていなかったっけ。なんていうの」

「僕、杳野正之。東京は浅草高校の三年生。よろしく」

「辻本雅美。金沢の兼六高校をこの春卒業。ただいま東京で浪々の身。どうも、どうも」

手を握り合う二人に、大沢は目を剝いた。
「なんや、知り合いやないんか」
「新幹線で隣り合うまではね」
「偶然、二人とも飛鳥めぐりやったというわけやな」
「さにあらず」
と杳野が割って入った。
「あっしが桜井へ行くと言ったら、こちらが、どういうわけか、大阪までの切符をペアにして、同行されたんでやんしてね。気楽な人ざんすよ、まったく」
「そのたいこもちみたいな言葉は、なんとかならへんのか。君は高校生やろ、それも江戸っ子の」
「浅草の生まれよ、ってね。でも、たいこもちとは有難いお言葉。オチケンの杳野といたしましてはプロと認定されたも同然の光栄」
「なんや、オチケンて？」
「落語研究会、略してオチケン」
高校には野球、体操、化学、演劇といった正統派クラブもあれば、ロック、ボウリングといった新興派も人気の点では遅れをとらない。そのなかでも、当節人気上昇中のオチケンを、
「ご存知ないとは……」
心外そうな杳野の言葉を、ふん、と大沢は鼻で弾いて、
「そのオチケンが飛鳥めぐりと、どない結びつくのや」
「多武峰の……そうだ、お巡りさん、あとで多武峰へ行く道を教えて下さいよ。多武峰のユースホステルで飛鳥高校のセイケンの連中と共同研究をすることになっていやすんでね」

ほう、と大沢と稲村は視線を合わせた。母校である。聞き捨てにはできなかった。
「セイケン？　セックス研究会か」
伝統を誇る母校に穢らわしい、と大沢は声を尖らせた。
「さすがア」
と杏野は、ぽんと額を打って、
「セイと聞いて性と解く。あんたも好きねえ。が、残念でした。生物研究会。春画より動物図鑑に興味があるという時代離れした奇特な連中でやんすよ、彼らおよび彼女らは。所詮、艶笑落語の味のわかる連中じゃないってね」
艶笑ものなら俺の好みだぜ、とは口に出せず、大沢は渋面を作って尋ねた。
「で、オチケンとセイケンが、なにを企んでるんや」
「さあ、それは本間彦左衛門のハラひとつ」
「本間？」
「彦左衛門ジイさんか？」
大沢と稲村が同時に叫んだ。
「おや、ご存知で」
「奈良で本間のジイさんを知らんやつはモグリやでェ。俺は会うたことはないが……」
と大沢は言葉を濁した。平巡査の会える相手ではなかった。奈良県きっての大ボスであった。奈良県は総面積の七割までが山林である。それも日本の三大美林と呼ばれる吉野杉をはじめ良質材の宝庫で、年産百万立方メートル。その山林の何分の一かは、本間彦左衛門の所有である。時価総額は、億の上の呼称が必要だろうと噂されるだけで、誰にも判らない。その底知れぬ財力は、当然のことなが

ら、財界だけでなく奈良政界にも底知れぬ影響力を持っていた。
「大物やでェ。君らの生まれる前の奈良県会の議長で、気の遠くなるような金持や。吉野ダラーを知ってるか。知らんような顔つきやな」
昭和四十四、五年からのことである。おりからのマイホーム・ブームで木材の値は高騰し続けた。吉野一帯の山林地主と林業家は太りに太った。一雨千両という言葉が生まれた。一雨降るごとに樹木が育って千万円の儲け、というのである。使い道に困った金は、北浜の株式市場へなだれ込んだ。
もともとが相場好きである。山では毎週、木材の市が立つ。そこで鍛えた相場のカンがある。投機性の強い小型仕手株が、格好のオモチャになった。買い煽り、売り叩く。なにしろ資金が大きい。一、三十人の山持ちが持ち寄れば三十億や五十億は軽い。その金が、小西六写真、国光製鋼、中外炉工業といった小型株に注ぎ込まれるのであるから、狙った株は旬日のうちに三倍にも五倍にも化ける。
素人の旦那衆の遊びに過ぎん、と最初は多寡をくくっていた証券会社も、大衆投資家までが追随しだしたのを見ると、無視できなくなった。〝あんなボロ株は〟と笑っても、〝吉野ダラーと言っても正体は誰だか判ったものではない〟と説いても、客が承知しない。吉野ダラーが買っているという噂だけで、その株が暴騰するという現実の前には、証券会社の理論派セールスマンも、お手上げであった。
「その吉野ダラーの家元、は変やな、元締めいうたらええのかいな。とにかく彦左衛門ジイさんが指一本振ったら百億の金が動いて、北浜や兜町の証券会社が真青になって、あぶつくというわけや」
「要するに地方投機集団の旗振りに過ぎないのじゃない？　つまりは資本主義社会の寄生虫だってこと」
辻本が顎を撫でながら軽くいなした。大物と認めた口調ではない。

「なんやて。ほな、君はアカか」
と大沢の口が、また尖った。地元の名物ジイさんを軽く見たな、と郷土贔屓の一言でもあった。
「垢にまみれた天下の浪人。でも、思想穏健、純情可憐」
「そのロぶりやとオチケンのOBやな」
「全然無関係。入学試験に落ちた、と書くほうのオチケン」
「漫才やってんのやないぜ」
と大沢の声は固くなった。
「それに薄気味の悪い細い声してて、ちいと女形やな。ホモのケがあんのんとちゃうか」
「侮辱！」
辻本は弾かれたように椅子から立ち上がると、目を吊り上げて大沢を睨みつけた。沓野が、ケケケケケ、とけたたましく笑って、同時に稲村が、
「ありゃ、りゃ」
と感に耐えたように目を剝いた。
「こら女子や。大沢、しっかり見てみいな。ジーパンの前は、ぷくっとも、どてっともしてへんわ。そのかわり胸は……」
「やっぱり、ぺちゃんこやないか」
と大沢は口のなかで、もぐもぐと反論した。
「へんなところばかり見ないでよ」
と辻本雅美は、さすがに鼻白む。
「けど、どう見ても男やで、その服装は」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com